

Mansfield Park の細部描写

「東の部屋」の透かし絵と「奴隷売買」の質問

中 尾 真 理*

Some Matters of Detail from *Mansfield Park*:

Transparencies in the East Room and Fanny's Inquiry on the Slave-trade

Mari Nakao

要 旨

ジェイン・オースティンの円熟期の大作『マンスフィールド・パーク』は細部描写にも作者の注意深い目が行き届き、背景となる小道具ひとつ、会話の一言にも作者の主張がさりげなく織り込まれている。本稿ではその「東の部屋」の細部描写に焦点をあてて考察する。とりあげる箇所は、第 1 巻16章、東の部屋の窓ガラスに貼られた「3枚の透かし絵」、及び、第 3 巻3章の奴隷売買についてのファニーの質問である。

3枚の透かし絵の図柄は「ピクチャレスクな風景」とも取れるが、ロマンティックな性格のヒロイン・ファニーにふさわしくロマン派詩人好みの風景を表すとも考えられる。透かし絵の1枚とワーズワースの「ティンターン・アベイ」の詩との関係についても検討する。

次に、ファニーの奴隷売買の質問を手がかりに、オースティンと奴隷制度について考察する。オースティンの好きな詩人ウィリアム・クーパーは、実は熱心な奴隷廃止論者であった。S・ジョンソンも奴隷制度には反対だった。これまでオースティン研究の定本であったチャップマン編オックスフォード版オースティン全集（1933）と、新しいケンブリッジ版オースティン全集（2005）の注を比較しながら、これらの細部描写について検討する。

（ ）「東の部屋」の透かし絵

（一）「東の部屋」 オックスフォード版オースティン全集

『マンスフィールド・パーク (*Mansfield Park*)』のヒロイン、ファニー・プライス (Fanny Price) の居室である「東の部屋 (East room)」を描いた第 1 巻16章は、室内の様子を細かく描写することによって、主人公の内面を描き出している。「東の部屋」は家庭教師のミス・リーがパートラム家の四人の子供、トム、エドモンド、マライア、ジューリア、それに養女で姪のファニー・プライスを教えた教室であったのが、子供たちの成長によって、今はファニーがひとり残り、私室として使っている。「東の部屋」はファニーの避難所であって、過去の思い出の詰まった場所

平成19年9月20日受理 *教養部准教授

である。そこにはかつて 'school room (教室)' であった頃の名残の品がそのまま保存されている。

Her plants, her books of which she had been a collector, from the first hour of her commanding a shilling her writing desk, and her works of charity and ingenuity, were all within her reach; or if indisposed for employment, if nothing but musing would do, she could scarcely see an object in that room which had not an interesting remembrance connected with it. (I, 16, pp.151-2, pp.178 C)¹⁾

この部屋にあるのは次のようなものである。

- (1) 鉢植えの植物、本、書き物机、貧しい人たちにあげる縫い物など、現在ファニーが使用中のもの。
- (2) ジューリアがかつてこしらえ、今は色あせてしまったスツール、今は不要となった子供用の家具、窓に貼られた三枚の透かし絵(ティンターン・アベイと、イタリアの洞窟、カンパーランドの月光の湖の図柄)、不できのためにこの部屋に置かれたままとなった家族の肖像画などの不用品。
- (3) ファニーが兄ウィリアムから贈られた英国軍艦アントワープ号の小さなスケッチや、気前のいいトムから折りに触れてファニーにプレゼントされた裁縫箱や手芸の箱(work-boxes and netting-boxes)の数々。

本はファニーがかなりの冊数を集めており、その一部は次のエドマンズの科白から題名がわかる。

・・・I shall go to him (= Tom) directly and get it over; and when we meet at breakfast we shall be all in high good humour at the prospect of acting the fool together with such unanimity. You in the meanwhile will be taking a trip into China, I suppose. How does Lord Macartney go on? (opening a volume on the table and then taking up some others.) And here are Crabbe's Tales, and the Idler, at hand to relieve you, if you tire of your great book・・・(I, 16, p.156, p.183C)

エドマンズは劇に加わる決心をすぐにもトムに伝えようと言った後で「あなたはその間、中国にでも旅行に行くのだらうね。マッカートニー卿はどうしてる?」と、テーブルの上の本を開け、さらに何冊かを取り上げて、「それに、ほらクラブの『物語』に、『アイドラー』も手近にあるのだね。重厚な本に疲れた時の息抜き用にさ・・・」と言っている。以上をチャップマン編オックスフォード版オースティン全集(*The Novels of Jane Austen*, ed. by R.W.Chapman, 3rd Edition)の解説と、一般的な知識を応用して整理すると、次のようになる。

まず、マッカートニー卿というのはアイルランド出身でカリブ諸島、マドラス、喜望峰の総督を歴任し、英国最初の訪中使節団の団長を務めた外交官ジョージ・マカートニー(George Macartney)(1737~1806)のことで、ここにあげられているのは彼の『中国使節日誌(*Journal of the Embassy*)』(1807)のことである。マカートニー卿の名前は白い蔓性の中国バラ(Macartney

rose)の名前として今も残っている。

次のクラブの『物語』というのは、詩人ジョージ・クラブ(George Crabbe)(1754-1832)の『*Tales in Verse*(韻文体の物語)』(1812)をさす。クラブはオースティンが愛好した詩人のひとりで、エドモンド・バーク(Edmund Burke)やサミュエル・ジョンソン(Samuel Johnson)と親しく、ロマン派の時代に活躍しながら、古典主義的な作風で知られている。細かく完成度の高い書きぶりがオースティンと似ていて、彼女自身クラブ夫人になりたいと思うほど好きだと言ったという話を甥のJ・E・オースティン・リーが伝えている²⁾。『アイドラー(*Idler*)』(1758-60)は有名な『ランブラー(*Rambler*)』(1750-52)より軽く短い随筆で、サミュエル・ジョンソンが『ユニヴァーサル・クロニクル(*Universal Chronicle*)』と『ウィークリー・ガゼット(*Weekly Gazette*)』に寄稿したもの。オースティンの「お気に入りの道徳的な作家は、散文ではジョンソン、詩ではクーパーだった」と「著者略伝(*Biographical Notice of the Author*)」で兄ヘンリーが述べた一人が、このジョンソンである³⁾。

チャップマン編オックスフォード版ジェイン・オースティン全集(1933)では、「東の部屋」の細部については、マカートニーとクラブの著作以外には特別の注記はない。物語はちょうど、パートラム家の子供たちが素人芝居を上演しようと、その稽古をしているところである。サー・パートラムの留守中に芝居を上演することに懐疑的なファニーは仲間には加わず、傍観者の立場をとっている。ところが、ファニーの頼みとする次男エドモンドまでが、隣家の牧師館に滞在中のメアリ・クローフォードの魅力に負け、芝居に加わることを宣言するに至り、ファニーの立場は微妙なものとなる。トムやノリス夫人からも、芝居に加わるようにと圧力がかかり、ファニーは「東の部屋」に避難する。「東の部屋」に示される細々とした描写は、大人になりきれない主人公ファニーの「女学生的」な内面を如実に物語るもので、かつては「教室」であったこの部屋をファニーは「避難所(サンクチュアリ)」として使っていると言える⁴⁾。

(二)「東の部屋」をめぐる環境 文学史における位置づけ

ここで、まずこの作品を取り巻く環境を概観しておこう。

『マンスフィールド・パーク』は1811年から13年夏にかけて書かれ、1814年5月に出版された。その当時の時代背景はと言えば、ナポレオンが大陸を封鎖中、英米は1812年から戦争状態に入っていた。ロンドンでは主な通りにガス灯がともる繁栄ぶりだったが、地方ではラッドライト運動が頻発している⁵⁾。オースティンは芳紀35歳から38歳で、チョートンで旺盛な執筆活動に専念する一方、『分別と多感』『自負と偏見』の出版準備のためにロンドンに住む兄ヘンリー宅(コヴェント・ガーデン近くのヘンリエッタ通り)をたびたび訪れている。ロンドンでは買い物と芝居を見るのが楽しみで、チョートンでの娯楽は専ら読書だった。残っている書簡からこの時期に読んだことがわかっているものとしては、ボズウェル(James Boswell)の『ヘブリデス諸島への旅(*Journal of a Tour to the Hebrides*)』(1785)、サー・ジョン・カー著(Sir John Carr)『スペイン紀行(*Descriptive Travels in the Southern and Eastern Parts of the Spain and the Balearic Isles, in the Year 1809*)』(1811)、ペイズリー大佐(Captain Pasley, R. E.)の『大英帝国の憲兵隊とその制度に関する考察(*Essay on the Military Policy and the Institutions of the British Empire*)』

(1810) ホレイショ・スミスとジェイムズ・スミス (Horatio and James Smith) の『拒絶された言葉、あるいは新韻文戯曲集 (*Rejected Addresses: or the New Theatrum Poeticum*)』などがある⁶⁾。手紙にはW・スコット (Sir Walter Scott) の『湖上の美人 (*The Lady of the Lake*)』(1810)、バイロン (G. G. Byron) の『異端者 (*The Giaour*)』(1813)、トーマス・クラークソン (Thomas Clarkson) の奴隷制に関する著作(後述)、アン・グラント (Anne Grant) 『山からの手紙 (*Letters from the Mountains*)』(1807) の名前もあがっているので、これらの作品もおそらく読んだことだろう。

というのも、オースティンは大の読書家で、詩であれ、小説であれ、新しい話題の作品はジャンルを問わずにじつによく読んでいたからだ。それに、たとえ読んでいなくても、会員制読書クラブ (library) や読書好きの親戚知人とのこまめな手紙のやりとりのおかげで、本の話題には明るかったはずである。

この時期 (M. P. 執筆当時) イギリスでは次のような作品が発表され、話題を集めていた。

- * クローディアス・ブカナン (Claudius Buchanan) 『アジアにおけるキリスト教研究 (*Christian Researches in Asia*)』(1811)、『インドにおけるキリスト教伝道の擁護 (*Apology for Promoting Christianity in India*)』(1813)
- * バイロン 『チャイルド・ハロルドの巡歴 (*Childe Harold's Pilgrimage*)』(1812)、『邪教徒 (*The Giaour*)』(1813) および 『アピドスの花嫁 (*The Bride of Abydos*)』(1813)
- * ジョージ・クラップ 『韻文の物語』(1812)
- * ロバート・サウジー (Robert Southey) 『ネルソン伝 (*The Life of Nelson*)』(1813)
- * シェリー 『女王マブ (*Queen Mab*)』(1813)

ブカナンはインドへの伝道に力を尽くした聖職者で、オースティンが手紙でクラークソンと共に大好きだと言った人物である⁷⁾。

また、評論では1802年に始まった『エディンバラ・レビュー』(ホイッグ党よりでロマン派詩人を攻撃したことで知られる政治文芸季刊雑誌) に対抗する形で、スコットなどが寄稿したトーリー党支持の評論紙『クウォーターリー・レビュー』が1809年に始まっている。『クウォーターリー・レビュー』はスコットが無署名で『エマ』への好意的な評論 (1816年3月、vol. XIV) を書いた雑誌である。出版を引き受けたジョン・マレー (John Murray) はオースティンの『マンズフィールド・パーク』第二版、『エマ』、『説得』(『ノーサンガー・アベイ』と合本) の出版社でもある。

変わったところでは、ウィリアム・コウム (William Combe) とトーマス・ローランソン (Thomas Rowlandson) の『ピクチャレスクを求めてシntax博士の旅 (*The Tour of Dr. Syntax in Search of the Picturesque*)』が *The Poetical Magazine* に1809年に登場して人気を集めている。風刺作家コウムと画家ローランソンがコンビを組んだ一連の『シntax博士』はギルピンのパロディーとも言うべきものであり、その後好評で幾つもの続編が出た。当時の読書界の傾向を知るには、このような評論誌や雑誌、人気漫画の存在も忘れるわけにはいかない。

(三) 「東の部屋」の透かし絵 ケンブリッジ版オースティン全集

さて、この同じ「東の部屋」の場面を、2005年に刊行の始まったケンブリッジ版オースティン

全集 (*The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen*) と、2000年以降の新しい研究書を参考に見直してみよう。

「東の部屋」には前にも述べたように、ジュリアが制作した手芸のスツールなど、今は不用となった装飾品が残されている。

The room was most dear to her, and she would not have changed its furniture for the handsomest in the house, though what had been originally plain, had suffered all the ill-usage of children and its greatest elegancies and ornaments were a faded footstool of Julia's work, too ill done for the drawing-room, three transparencies, made in a rage for transparencies, for the three lower panes of one window, where Tintern Abbey held its station between a cave in Italy, and a moonlight lake in Cumberland; a collection of family profiles thought unworthy of being anywhere else, over the mantle-piece, and by their side and pinned against the wall, a small sketch of a ship sent four years ago from the Mediterranean by William, with H.M.S. Antwerp at the bottom, in letters as tall as the mainmast. (, 16, p.152, pp.178-9C) (下線は筆者)

文中下線部の窓に貼られた3枚の「透かし絵」(three transparencies) に注目してみたい。

この「透かし絵」については、オックスフォード版全集では特に注は施されておらず、OED (第二版) を見てもぴたり該当する説明がなかった。OEDには「ガラスやその他の透明な物質の上に描かれた絵、光を照射して見るよう意図されたもの」という用法があげられているが、その初出は1866年である。しかし、この言葉が写真の透明ポジ (陽画) の意味でも使われていることから考えて、透明な紙または布に描いた影絵のようなもので、しかも窓に貼られているところから、ステンドグラスのような効果が得られたのであろうと筆者は考えていた。

さて、新しく刊行されたケンブリッジ版オースティン全集を見ると、この部分にはかなり詳しい注が施されている。しかも、「透かし絵」はステンドグラスの代用品であると明快に言い切っている。作り方の説明もあり、紙の上に特別な顔料と墨汁 (Indian ink) を用いて描き、テレピン油とニスで仕上げをするらしい (p.686 C) 。テキストには「透かし絵が大流行であったときに作られた (made in a rage) 」とあるが、ケンブリッジ版の注では「透かし絵の作り方 (*Instructions for Painting Transparencies*) という冊子が1802年に出されていたことも述べられており (p.686 C) 「透かし絵が大流行であった」のが事実であったことがわかる。

さて、次に問題にしたいのが、透かし絵の図柄である。透かし絵は3枚あり、「ティンターン・アベイが、イタリアの洞窟と、カンバーランドの月光の湖の間に場所を占めている」 (p.152, p.179C) (引用下線部) ことになっている。

オックスフォード版ではこの部分にも注はないが、ケンブリッジ版では、「透かし絵」は青白い月光に映えるゴシックの廃墟などの図柄が特に劇的な効果をあげたと、説明されている (p.686C) 。3枚の「透かし絵」はまさしくそのような図柄である。また、ケンブリッジ版には「ティンターン・アベイ」がギルピン (William Gilpin) の著作『ワイ川河畔の観察』 (*Observations on the*

River Wye ...relative Chiefly to Picturesque Beauty; Made in the Summer of the Year1770) によく知られていた場所であったこと、ギルピンの本にはティンターン・アベイの挿絵が二葉含まれていたことも述べられている。要するに、3枚の透かし絵がギルピンによって有名になった、いわゆる「ピクチャレスクな風景」であると明示されている。また、「イタリアの洞窟」については、ダービーに住む Joseph Wright なる人物がそのような画題の絵を多数描いており、窓の透かし絵はそのひとつを模したものだろとうとしている。

以上がケンブリッジ版の注から知られることで、オックスフォード版より親切で丁寧な説明がありがたい。ここからさらに、この3枚の透かし絵をロマン派詩人の時代という枠組みの中で考察してみたい。

(四)「ティンターン・アベイ」

「イタリアの洞窟、ティンターン・アベイ、カンバーランドの月光の湖」と聞けば何を連想するだろうか。いかにもロマン派詩人好み (Romantic) な情景ではないだろうか。ワーズワースの詩「ティンターン・アベイより数マイル上流にて詠める詩 (‘ Lines Composed a Few Miles above Tintern Abbey ’)」(1798) が思い出されるだろう。イタリアの洞窟と言えば、バロック趣味のイタリア庭園に洞窟のあるのがよく知られているが、洞窟は古来、詩の女神ミューズの棲む場所と考えられてきた。カンバーランドは湖水地方である。異国の洞窟、人里離れた北の夜の湖、廃墟となった修道院と言えば、ケンブリッジ版の注でも述べられているように、典型的なピクチャレスクの風景というのが一般的な考えである。普通の「美 (Beauty)」ではなく、エドモンド・パークやギルピンの言う「崇高な美 (Sublime Beauty)」を感じさせる「ピクチャレスクな風景」の典型である。「透かし絵が流行ったころにこしらえた」とあるから、往時の (と言っても数年前の) 名残なのである。しかし、ファニーはそれを今も大切にしている。その理由はロマン派詩人の世界に通じるものがこれらの絵にあるからではないだろうか。大胆な言い方をすれば、3枚の透かし絵はオースティンが10代の頃から親しんだギルピン風ピクチャレスクの風景というよりも、むしろファニー好みのロマン派詩人たちの詩を想起させる目的で使われているのである。というのもファニーはロマンティック (romantic) な性格のヒロインとして造形されているからだ。例えばファニーは 部9章でソザートンの庭園改良計画を聞くと早速クーパー (William Cowper) の詩 (*The Task, Book 1*) を思い出している (I, 6, p.56, p.66C)。また、ラッシュワース家の礼拝堂では、スコットの『最後の吟遊詩人の歌 (*The Lay of the Last Minstrel*)』(1805) の一節を引き合いに出して、エドモンドを苦笑させている (I, 9, p.85-6, p.100C)⁸⁾。スコットの詩とは比べべくもない簡素なソザートンの礼拝堂に、ファニーはいたく失望しているのだが、その時、ファニーの頭の中にあった ‘blown by the night wind of Heaven (天の夜風に吹かれ)’、‘Scottish monarch sleeps below (下にはスコットランド王家の眠る)’ 礼拝堂のイメージは、まさしく東の部屋の3枚の透かし絵を合成したような光景だったのでないだろうか。

オースティンは『マンスフィールド・パーク』 巻2章で、‘romantic’ という言葉を、当時普通につかわれていた「ロマンスみたいに現実離れのした」と言う否定的な意味ではなく、「小説のようにロマンティックな」という肯定的な意味合いで使っている。

He (= Sir Thomas) who had married a daughter to Mr. Rushworth. Romantic delicacy was certainly not to be expected from him. (, 2, p.331, p.382C)

これは描出話法でファニーの内面を語っている部分で、‘ He ’ はサー・トーマスのこと。本稿(二)で述べたごとく、執筆当時、ロマン派詩人の評価をめぐる『エディンバラ・レビュー』と『クウォターリー・レビュー』が対立していたことからわかるように、‘ romantic ’ なる語の意味するところは、肯定的に見るか否定的に見るかで揺れ動いていた。詩人ではクーパーやクラップ、散文ではジョンソンが好きだったために、保守的なイメージのあるオースティンだが、実はスコットやバイロンの詩をよく読んでいる。オースティンは『説得』や『サンディトン』においてコールリッチ、バイロン、スコットの詩に耽溺する人物(ベンウィック大佐、サー・エドワード・デナム)を滑稽で愚かだと風刺しているが、18歳のファニーには敢えて、その年齢にふさわしく、ロマンティックな性格を与えている。メアリ・クロフォードのハーブ演奏もスコットの「マーミオン(*Marmion*)」(1808)の影響ではないかと、ケンブリッジ版の注には記されている(pp.657-8C)。星の観察が好きで、熱狂的に常緑樹を崇拜し、クーパーの詩句を思い出して切り倒される前の並木を見たいと言い出すなど、ファニーは世間知らずの文学少女として描かれている。ただ、注意すべきはファニーがキャサリン・モランド(*Catherine Morland*)のようなゴシック小説好きではない、ということだ。読むのは流行小説ではなく、詩または随筆、旅行記なのである。そのファニーの内面を象徴する東の部屋に、ロマン派詩人への憧れを示すものがあったもおかしくはない。窓に貼られた3枚の透かし絵は、ファニーのロマン派詩人への傾倒を表すものと考えてよいのではないだろうか。

ロマン派詩人との関連からすれば、ファニーの部屋の窓に貼られた「ティンターン・アベイ」の透かし絵はもちろん、ワーズワースの詩「ティンターン・アベイより数マイル上流にて詠める詩」と考えてさしつかえないだろう。

W・デレジーヴィッツは著書『ジェイン・オースティンとロマン派詩人たち(*Jane Austen and the Romantic Poets*)』(2004)の中で、ティンターン・アベイはギルピンの著作でよく知られたピクチャレスクのメッカではあるけれど、『マンスフィールド・パーク』が出た1814年には、その流行からすでに2、30年もたっていたこと、ワーズワースの「ティンターン・アベイ」の詩はそれより新しく、しかもワーズワースの名声が高まりつつあった時代の空気を考慮に入れると、透かし絵の「ティンターン・アベイ」はギルピンの版画ではなく、ワーズワースの詩を連想させる意図があったのだらうと述べている⁹⁾。

これは大胆だが、もっともな指摘でもある。ピクチャレスク運動が一世を風靡したのは18世紀後半のことであり、『マンスフィールド・パーク』執筆当時は、すでに新鮮味に欠ける話題になっていたと言えるだろう。エドモンド・パークのエッセイ『崇高なるものと美についての哲学的考察(*A Philosophical Enquiry into the Sublime and the Beautiful*)』が書かれたのは1756年、牧師ギルピンがクロード鏡(*Claude glass*)を片手にピクチャレスクの旅に出て、『ワイ川河畔の観察』を発表したのが1770年。その後、大勢の観光客が、ギルピンを旅行案内書代わりに、湖水地方やスコットランドを目指すようになる。『自負と偏見』でエリザベスが湖水地方からダービシャー

への旅行に出ようとするのも、このブームの一端である。クロード鏡と言うのは、クロード・ロランの絵のような風景を写しだすことのできる携帯用凸面鏡のこと。セピア色やグレイに着色しており、古いイタリア絵画の雰囲気醸し出すようになっていたという¹⁰⁾。

1794年には画家のJ・M・W・ターナーもティンターン・アベイを訪れ¹¹⁾、ワーズワースは1793年と1798年にティンターン・アベイを訪れている。中島俊郎『イギリス的風景 教養の旅から感性の旅』(NTT出版、2007年)第二章によると¹²⁾、18世紀末にはティンターン・アベイは既にピクチャレスクを求めるツアー客の観光スポット化していたというのが、真相であるようだ。もともとピクチャレスク・ツアーは風景をひとつのスタイルに当てはめて見るという趣旨のものだったから、ツアー客は何の疑念も抱かず、ギルピンの著作とクロード鏡を片手に「観光スポット」を巡って歩いたようである。(二)で触れたように『シンタクス博士』のシリーズが人気を集めるなど、ピクチャレスク・ツアーは戯画化され、大衆化の段階に突入していたのである。

(五) ワーズワースの「ティンターン・アベイ」

さて、デレジーヴィッツによれば、ワーズワースの「ティンターン・アベイ」は単にロマン派好みの崇高美の象徴としてだけではなく、より深い部分で、ファニーの「東の部屋」と関わっている。

ワーズワースがワイ川上流数マイルのところ感慨にふけっているのは、過ぎ去った5年間の月日を思っていることである。

Five years have past; five summers, with the length
Of five long winters! And I again hear
These waters, rolling from their mountain-springs
With a soft inland murmur. ('Tintern Abbey', l-4)

「ティンターン修道院より数マイル上流にあるワイ川のこの地がワーズワースの個人史に深く関わっているように、東の部屋もまたファニーの個人史に深く関わっている」とデレジーヴィッツは述べている(p.57)。ワーズワースが目の中の景色を見て、過ぎた5年間の時間を悲しみも苦しみも含めて思い出し、思い出すことによって、慰めを得ているように、ファニーもまた、東の部屋の思い出の品々を見て、心の平穏を得ているという。

Here (= the East Room) she has accumulated a collection of powerfully evocative mementos: "work-boxes and netting-boxes," "transparencies," "family profiles," "a small sketch of a ship sent four years ago from the Mediterranean by William", and so forth (127). In short, "she could scarcely see an object in that room which had not an interesting remembrance connected with it". (*Jane Austen and the Romantic Poets*, p.57)

ファニーには東の部屋に、「裁縫箱に手芸箱」「透かし絵」「家族の肖像画」など、強力に昔を

喚起させる力をもった記念品を蓄積してきた。その結果、「この部屋にあるどの品を見ても、それにまつわる興味深い思い出がある」状態になっている。

デレジーヴィッツによれば、回想は過去を変える（transform）力を持っている。思い出すことによって、辛い過去も変化し、いつしか甘美な思い出となる。回想することが慰めとなるのである。

Memory functions here in just the way that distinguishes Wordsworth's conception of it from that of the eighteenth century: flatly recording the past, but transforming it, refiguring it, reinterpreting it, and in particular as I noted in the previous chapter, redeeming experiences of suffering and loss by recognizing them as part of the texture of the self and its history. (*Jane Austen and the Romantic Poets*, p.58)

東の部屋の場面で、ファニーが思い出に浸りながら、芝居騒動によってかき乱された精神の平静を取り戻しているのは、まさしくワーズワースが「ティンターン・アベイの上流の地点」の詩で行っていることと同じだとデレジーヴィッツは言うのである。

なるほど、「東の部屋」の場面には、ワーズワースの「ティンターン・アベイ」に照応する部分が多い。たとえば、ファニーがこの部屋の品々を大切に思っていることを記述する次の部分、
'The room was most dear to her . . . / Every thing was a friend, or her thoughts to a friend (I, 16, p.152, p.178C)' という部分などは、ワーズワースの詩の '. . . though my dear Friend, / My dear, dear Friend' に似ている。ただ、オースティンがワーズワースのこの詩を読んだという証拠はない。影響を受けたことを示す傍証すらないのである。しかし、デレジーヴィッツの説は「東の部屋」がファニーにとって精神安定剂的機能を持つことを、充分に把握して展開しているだけに、説得力がある。オースティンとロマン派詩人の関わりについては今後新しい展開が期待される。

（ ） 奴隷制度とオースティン

（一）ファニーの発言

次に「東の部屋」の場面に出てくる本について、奴隷制度とその廃止運動（Abolition）という観点から検討してみたい。この問題はポスト・コロニアリズム以後、特に注目を集めているところである¹³。しかし、オースティンが『マンスフィールド・パーク』を執筆していた当時、この問題はずっと生々しい形で人々の良心を悩ませていたに違いないのである。

ファニーは東の部屋に子供時代の思い出の品だけでなく、鉢植えの植物や本を置いている。その本の一冊がジョージ・マカートニーの『中国使節日誌』であり、ジョージ・クラップの『韻文体の物語』とサミュエル・ジョンソンの『アイドラー』であることは前に述べた。『アイドラー』と、第 3 章でファニーがサー・トーマスにした奴隷売買（slave-trade）についての質問の関係を探してみたい。

まず、オースティンのテキストから質問の部分を確認しておこう。

"But I do talk to him more than I used. I am sure I do. Did not you hear me ask him about the slave-trade last night?" (, 3, p.198, p.231C)

これはファニーとエドモンドが語り合っている場面である。エドモンドがファニーに遠慮せずもっとサー・トーマスに話しかけるようにと言ったのに対し、「でも、私、以前よりは伯父様に話しかけているわ。昨晚、伯父様に奴隷売買について質問したのをお聞きになったでしょう」とファニーは言う。

ファニーが奴隷売買について質問したのは、アンティグアから二年ぶりに帰国したサー・トーマスを囲む家族団樂の場面でのことだった。突然の帰国に家族はとまどい、父親の無事を喜ぶよりそれぞれの秘密を隠すのに忙しかった。奴隷労働でなりたっている西インド諸島アンティグアの農園から戻ったばかりのサー・トーマスに、奴隷売買についての質問をすとは、現代の我々から見れば大胆不敵に思われる。しかも、ファニーは伯父が西インドのことを語るのを聞くのが面白いというのだ。

"I suppose I am graver than other people," said Fanny. "The evenings do not appear long to me. I love to hear my uncle talk of the West Indies. I could listen to him for an hour together . . ." (, 3, p.197, p.230C)

ファニーの口ぶりから、久しぶりに家族の元に戻ったサー・トーマスが、いつまでも西インドでの体験を語りたいたい気分であることがわかる。しかし、家族は退屈して、あまり身を入れて聞いてはいないようだ。

レイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams) やエドワード・W・サイド (Edward.W. Said) がサー・トーマスのことを、西インドで財産を成したという意味で「西インドの人 (West Indian)」であると指摘して以来、アンティグアの地所と現地の農園にいるはずの奴隷の存在はオースティン研究者にとって黙殺できない問題となった。ところで、仮にもし、サー・トーマスが奴隷制度賛成論者で、アンティグアの農園で奴隷を酷使しているのだったら、家族団樂の場でファニーがこんな質問をするわけではないだろう。しかも、エドモンドは、ファニーの質問のあとに他の人からも質問が出ればサー・トーマスも喜んだのに、誰も後を続けなかったと残念がっているのだ。

I did and was in hopes the question would be followed up by others. It would have pleased your uncle to be inquired of farther. (, 3, p.198, p.231C).

質問は続くどころか、ファニーによるとその場は「しーんと恐ろしい沈黙に包まれ (but there was such a dead silence!) (, 3, p.198, p.231C)」てしまった。質問が続かなかったのは、マライアとジュリアが、ファニーはサー・トーマスにへつらって、あえてお得意の話題に質問を向けたのだと考えて、鼻白み、黙ってしまったからである。ファニーは「私なら一時間でもお話を聞

いてられるのだけど (I could listen to him for an hour together) (, 3, p.197, p.230C) 」と
 ているが、以上のやりとりから考えて、奴隷の話題はサー・トーマスにとって、「できれば避け
 たい話題」どころか、一時間でも話してられる「お得意の話題」だったと考えられる。

(二) 奴隷制度廃止 (Abolition) オックスフォード版とケンブリッジ版

さて、奴隷売買は1807年に廃止されたが、それはイギリス国内だけの話で、帝国内の全域で奴
 隷が廃止されたのは、オースティン死後の1833年のことである。ところでパートラム家の家計の
 一部が、西インド諸島アンティグアの農園収入に頼っていることは、 巻3章に示されている。パー
 トラム家に限らず、当時のイギリスの地主階級の中には海外にも地所を持つ例が少なくなかった。
 サー・トーマス自身、そうしたいわゆる「西インドの人」であることについては、今では異論は
 ないだろう。アンティグアから帰ったばかりの伯父に現地での奴隷売買の様子を聞くファニーは、
 1807年に成立した奴隷廃止法案を念頭に置いていたに違いない。小説の時代設定は1808年か1809
 年である¹⁴⁾。「奴隷売買」について、オックスフォード版 (1933) には注がないが、ケンブリッジ
 版 (2005) には詳しい注があり、二つの全集の編まれた時代の関心の違いを示している¹⁵⁾。

ケンブリッジ版の注によると、奴隷売買が1807年に禁止されるに至ったのは、トーマス・クラ
 クソンやウィリアム・ウィルバーフォース (William Wilberforce) らの尽力が大きかった。当時、
 オースティンの読者層であるリベラルな知識人の間では、すでに奴隷売買は嫌悪すべきものと見
 られていたこと、西インド諸島の砂糖農園ではまだ奴隷が使われていたが、おそらくその状況は
 かなり改善されていただろうこと、さらにサー・トーマスは、奴隷売買の問題については良心に
 やましいところがなかったのだろうと解説している (p.693C) 。

(三) マンスフィールド判決と詩人クーパー

「奴隷制度廃止」とジェイン・オースティンの関係についてはGabrielle D.V. Whiteが*Jane Austen
 in the Context of Abolition* ‘ A Fling at the Slave Trade (Palgrave Macmillan, 2006) で、詳
 しく検討している。それによると、オースティンが生まれる3年前の1772年に、マンスフィールド
 と言う名前の首席裁判官 (Lord Chief Justice) が奴隷制度に関してある重大な決定を下した。
 それはジェイムズ・サマーセット (James Somersett) という逃亡黒人とその所有者の間で争わ
 れた事件で、マンスフィールド卿は、結局、奴隷状態はいかなることがあっても許さるものでは
 ないとして、被告人を釈放するに至った。これによってサマーセットがヴァージニア植民地 (ま
 だ独立戦争前だった) に送り返され、奴隷の身分に戻される心配はなくなった。この判決は後の
 奴隷廃止運動に大きな影響を与え、マンスフィールド判決 (Mansfield Decision) と呼ばれてい
 る¹⁶⁾。

このマンスフィールド判決に感激したのが、奴隷廃止論者で1807年の奴隷廃止法の制定に尽力
 したトーマス・クラクソン (1760 - 1846) である。クラクソンはブカナンと並んでオースティ
 ンが「昔、大好きだった (I am as much in love with the author (= Captain Pasley, q.v.) as
 ever I was with Clarkson or Buchanan) 」と姉に書き送った人物である (*Letters*, 24 Jan. 1813) 。

クラクソンは国会議員のウィルバーフォースと協力して、奴隷廃止法案が国会で認められる

よう尽力した。このことについては最近よく知られるようになったが、ここでオースティンの大好きな詩人の一人、ウィリアム・クーパーと奴隷制度廃止運動の関係について、ホワイトの指摘するところに耳を傾けよう。

それによると、詩人クーパーは熱心な奴隷廃止論者であった。

クーパーは国民的な詩人であったが、彼にはもう一つの顔があり、当時の人々はクーパーと言えば奴隷廃止論とを結びつけて考えていたというのである。

People also associated Cowper with the abolitionist cause, so that reference in the novels to him could be associated by readers at the time with his passionate abolitionist views. (*Jane Austen in the Context of Abolition*, p.136)

活動家クラークソンもその著 *History of the Rise and Progress, and Accomplishment of the Abolition of the African Slave-trade by the British Parliament* (1808)の中で、クーパーの詩(*The Task*)の中から、42行にもわたって引用している(*J. A. in the Context of Abolition*, Appendix 3)。

クーパーは*The Task* (1785)という彼の代表的な詩のBook で、公然と奴隷制度を非難している。

My ear is pained.

My soul is sick with every day's report
Of wrong and outrage with which earth is fill'd.
There is no flesh in man's obdurate heart,
It does not feel for men

.....

He finds his fellow guilty of a skin
Not colour'd like his own, and having pow'r
T'inforce the wrong, for such a worthy cause
Dooms and devotes him as his lawful prey. (*The Task*, ll. 5-15)

.....

自然と静謐を愛した詩人というイメージを覆すような激しさで、クーパーは奴隷制度を攻撃している。『ジェントルマンズ・マガジン (*Gentleman's Magazine*)』に寄せた‘*The Morning Dream*’ (1778)という詩では、奴隷廃止という正義を掲げて、植民地アメリカを失って問もないイギリス人の愛国心に訴え、それを鼓舞するかのよう、次のように詩の最後を締めくくっている。

That Britannia, renown'd o'er the waves
For the hatred she ever has shown

To the black-sceptred rulers of slaves,
Resolves to have none of her own. ('The Morning Dream')

しかし、一方でクーパーは奴隷制度には反対でも、砂糖やラム酒のない生活に耐えられるだろうかという複雑な胸中を正直に吐露してもいた。(*Jane Austen in the Context of Abolition*, p.141)

I own I am shock'd at the purchase of the slaves,
.
I pity them greatly, but I must be mum,
For how could we do without sugar and rum?
Especially sugar, so needful we see?
What? Give up our desserts, our coffee, and tea! ('Pity for Poor Africans')

「アフリカ人を哀れむ」というこの詩が1778年8月9日の*Northampton Mercury* 紙に発表されると、クーパーは奴隷制度についての態度を変えたのではないかという非難が集まり、慌てたクーパーが同じ新聞に、ウィルバフォースを称えるソネットを発表するという一幕もあったらしい¹⁷⁾。ホワイトはこの顛末をオースティンが知っていて、敢えてマンスフィールド・パークをノーサンプトン州に設定したのだらうとも述べているが、いかがなものだろうか。

(三) クーパー、ジョンソンと奴隷廃止論

オースティンはクーパーが大好きで、『マンスフィールド・パーク』でもクーパーの詩を使っている。例えば、部6章(p.56, p.66c)で、ラッシュワース氏がソザートンの庭園を改良する計画を立てているのを知ったファニーは、並木が切り倒される前には是非見たいと言うが、これはクーパーの*The Task* (Book 1, 'The Sofa', lines 338-430)を思い浮かべての発言である。また、部14章(p.431, p.499C)のポーツマス場面でもクーパーは使われており、マンスフィールド・パークを懐かしく思うファニーの気持ちが、クーパーの'Tirocinium'の詩句に重ね合わされる。

Her eagerness, her impatience, her longings to be with them, were such as to bring a line or two of Cowper's Tirocinium for ever before her. "With what intense desire she wants her home," was continually on her tongue, as the truest description of a yearning which she could not suppose any school-boy's bosom to feel more keenly. (, 14, p.431 p.499C)

クーパーだけではない。オースティンが敬愛する作家サミュエル・ジョンソンもホワイトによれば、また奴隷廃止論者であった。ホワイトはその一例として、『アイドラー』81号(1759年11月3日号)の一部を巻末に掲げている。ファニーの東の部屋のテーブルの上にさりげなく置いてあった一冊である。エドモンドは『アイドラー』を取り上げた時、奴隷については何も言ってい

ないが、作者はどのような意図でジョンソンのこの一冊を使ったのだろうか。

『アイドラー』の他にも『マンスフィールド・パーク』には、ジョンソンの『ラセラス (*The History of Rasselas: Prince of Abyssinia*)』の一部が使われている(, 8, p.392, p.454C)。典雅で哲学的な寓話『ラセラス』の文章にオースティンが親しんでいたことがよくわかる¹⁸⁾。ファニーが星を観察する趣味を持っているのも、『ラセラス』39章のペクア姫 (Princes Pekuah) の物語から思いついたと思われるが、どうだろうか。

さらにまた、ホワイトによれば、オースティンの兄で海軍提督であったフランシス・オースティンも熱心な奴隷廃止論者であった (*J.A. in the Context of Abolition*, pp.148-151)。このようなことはこれまで余りとりあげられてこなかったが、こうした家族の伝記の中にもこれから明らかにされる部分があるだろう。オースティンは福音主義に理解を示していた¹⁹⁾(奴隷廃止運動は主に福音主義者たちによって展開された)。牧師の一家であったオースティン家の五男で、温厚な人柄で知られるフランシスが奴隷廃止論者であったとしても不思議はない。

(四) 結論

1807年に成立した「奴隷禁止法」については、軽く触れられることはあっても、奴隷売買とオースティン自身の関わりについては、これまでほとんど触れられてこなかった。だが、砂糖入りの紅茶のために、非人道的・非キリスト教徒的な行為を見過ごしていいのかと言う問題は、当時の進歩的知識人の胸中に長らく刺さった大きな棘であったに違いないのである。この問題にオースティンがどの程度の関心を抱いていたかということについては、まだこれから明らかになる部分もあるだろう。ロマン派詩人との関係についてはだいぶ取り上げられるようになってきた²⁰⁾。オースティンは常に文学の新しい動向に敏感だったから、東の部屋の窓ガラスに貼られている3枚の透かし絵に、当時の新風であったロマン派詩人への傾倒ぶりを読みとることは可能である。また、東の部屋のテーブルに置かれている本に、奴隷制度反対の態度表明がなされていると、読みとることもまた可能なのである。とはいうものの、これらはいずれも細部描写として、さりげなく書かれているにすぎない。このこともまた念頭に置いておく必要はあるだろう。

とはいえ、二十代の初めにほとんど書き上げられていた『自負と偏見』『分別と多感』とは違い、円熟期の大作『マンスフィールド・パーク』は中年になった作者が、長い沈黙のあとに渾身の筆を振るった作品である。細部に至るまで、作者の主張の一端が織り込まれている。奴隷への言及は次の『エマ』にも見られ、ロマン派詩人への風刺は『説得』にもまた『サンディトン』にも大きくとりあげられることになる。著者の秘かな主張のひとつであったことに間違いはないだろう。ヒロインの内面を象徴する「東の部屋」の細部描写は興味が尽きない。

注

1) テキストからの引用はオックスフォード版 (*The Novels of Jane Austen*, ed. by R.W.Chapman, 3rd Edition, Oxford U.P. 1933) とケンブリッジ版 (*The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen*, Cambridge U.P., 2005-6) の両方の頁字数を示している。数字の後にCのついているのが、ケンブリッジ版の頁数で

ある。

- 2) James Edward Austen-Leigh, *A Memoir of Jane Austen*, chap.5.
- 3) 'Biographical Notice of the Author' by Henry Thomas Austen, *The Novels of Jane Austen* vol.V. (Oxford U.P., 1933). なお、甥エドワードは、散文ではジョンソン、詩ではクーパー、クラークソンは詩と散文の両方ともが好きだったと言っている。James Edward Austen-Leigh, *A Memoir of Jane Austen*, chap.5.
- 4) 拙著『ジェイン・オースティン 象牙の細工』(英宝社、2007)第三章参照。
- 5) Paul Poplawski, *A Jane Austen Encyclopedia* (Greenwood Publishing Groups, 1998), 'Chronology'. 邦訳『ジェイン・オースティン事典』向井秀忠監訳(鷹書房弓プレス、2003)年表。
- 6) R.W.Chapman ed., *Jane Austen's Letters to Her Sister Cassandra and Others* (Oxford U.P., 1952). Deidre Le Faye ed., *Jane Austen's Letters* (Oxford U.P. 1995). Paul Poplawski, *A Jane Austen Encyclopedia* (Greenwood Publishing Groups, 1998).
- 7) *Letters*, 24 Jan. 1813.
- 8) この詩はファニーが舞踏会を早めに退出する場面でも言及されている。 , 10, pp.280-81, p.326C.
- 9) William Deresiewicz, *Jane Austen and the Romantic Poets* (Columbia U.P., 2004), p.9.
- 10) 高橋哲雄『イギリス歴史の旅』(朝日選書、1996)32-3頁。松平圭一『明日は緑の森に』(西日本出版、2005) 章、61-3頁。中島俊郎『イギリス的風景』(NTT出版、2007)第三章、136-7頁。
- 11) 荒廃したアベイをターナーが内部から描いた「ティンターン・アベイ内部」(1794)の図が有名。
- 12) 73-5頁。他に小池滋『ゴシック小説を読む』(岩波書店、1999)第一講57-62頁参照。
- 13) オースティンと奴隷制度の問題については、向井秀忠「ポストコロニアリズムのもたらしたもの」津久井良充・市川薫編著『<私>の境界 二十世紀イギリス小説における主体の所在』(鷹書房弓プレス、2007)が参考になる。
- 14) R・W・チャップマンの推定。 *The Novels of Jane Austen*, p.354. ただし、この推定だと1812年発行のG.Crabbeの *Tales in Verse* が東の部屋にある理由がわからない。
- 15) Oxford版第V巻の巻末の総索引(General Index)には、クラークソンの名前と著書がClaudius Buchananの項にあがっているが、彼が奴隷廃止論者であったことを示す記述はない(p.318)。
- 16) Gabrielle D.V. White, *Jane Austen in the Context of Abolition 'a Fling at the Slave Trade'* (Palgrave Macmillan, 2006), pp.5-7.
- 17) G.D.V.White, *Jane Austen in the Context of Abolition*, p.141-2.
- 18) たとえば、 *Pride and Prejudice*(, 1, p.135) で Elizabeth が 'The more I see of the world, the more am I dissatisfied with it;' と嘆くのは、 *Rasselas* 26章でRasselasが 'the more we inquire, the less we can resolve' と嘆くのに基づいていると思われる。
- 19) *Letters*, 18 Nov. 1814.
- 20) さとう瑛美子『ジェイン・オースティンの手法について 風景描写を中心に』(ブイツーソリューション、2004)はこの観点からの一冊である。Barbara Britton Wenner, *Prospect and Refuge in the Landscape of Jane Austen* (Ashgate, 2006). はフェミニズム的風景論。Colin Winborn, *The Literary Economy of Jane Austen and George Crabbe* (Ashgate, 2004) は詩人クラブとオースティンの18世紀風簡潔な文体との類似点を扱っており、観点が異なる。

Summary

In *Mansfield Park*, Jane Austen carefully selects and skilfully employs her subjects even in the smallest

matter of detail. I will focus on two details – three transparencies on the window panes of the East room (vol. 1, chapter 16) and Fanny's inquiry on the slave-trade in Antigua (vol. 1, chapter 3) – and explore why and how such trivial matters are woven into this most serious masterpiece.

It is believed that the three transparencies – Tintern Abbey, an Italian cave, and a moonlight lake in Cumberland – show some of the former days' craze for 'picturesque' scenes. But do they not represent the heroine's 'Romantic' literary tastes as well as her 'romantic' character? The possibility of one of the transparencies implying Wordsworth's 'Tintern Abbey' will be discussed.

Fanny's bold inquiry on the slave-trade reflects the author's keen interest in the problem of slavery. Recent studies show that William Cowper, Austen's favourite poet, and Samuel Johnson, her favourite essayist, were in fact keen abolitionists.

This paper depends on two standard texts of Jane Austen's works, *The Novels of Jane Austen* (Oxford edition), published in 1933, and the new *Cambridge Edition of the Works of Jane Austen*, published in 2005. On the transparencies and the slave-trade, the new Cambridge edition includes helpful notes, whereas the Oxford edition gives none.